The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	立命館大学図書館蔵奈良絵本『さころも』の翻刻と解題
Author(s)	須藤, 圭; 川崎, 佐知子
Citation	詞林. 2014, 55, p. 18-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67666
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

立命館大学図書館蔵奈良絵本『さころも』の翻刻と解題

須藤　圭
川崎　佐知子

［解題］

室町物語『狭衣』は、平安後期物語『狭衣物語』の主人公狭衣と飛鳥井女君の恋物語を中心とする改作である。伝本はきわめて多く、奈良絵本・写本・版本など、およそ四十本が報告されている。「狭衣の草子」「狭衣大将物語」「狭衣中将物語」などの呼称がある。本稿では、新出の立命館大学図書館蔵奈良絵本『さころも』二冊（資料番号〈1100276826 3〉〈1100276827 5〉）を紹介する。

立命館大学図書館蔵奈良絵本『さころも』（以下、「立命館大学蔵本」と称する）は、改装帙入。横型袋綴冊子本の上下二冊。寸法は縦一七・六糎、横二六・〇糎である。表紙は、檜皮色地菱繋空押文様紙。表紙の中央に、朱色無地紙題簽「さころも　上（下）」を押す。見返しは本文共紙。本文料紙は間似合紙。本文は毎半葉一三行で書かれている。墨付丁数は、上冊二五丁、下冊三三丁。本文中に、和歌が七首ある。また、極彩色の挿絵が、上冊には七図、下冊には六図認められる。江戸初期写。

室町物語『狭衣』の諸本の本文系統は、松本隆信氏[1]、橘りつ氏[2]、真下美弥子氏[3]によって提示されている。それぞれ分類の方法は異なるが、「むかし、くわんむてんわうの御とき」で始まる立命館大学蔵本をこれらにあてはめると、松本氏論考の第二類、橘氏論考の昔桓武天皇本系統、真下氏論考のB系統第三類である。同類本に、慶応義塾大学図書館蔵慶長二年写本[4]、内閣文庫蔵写本[5]がある。

ただし、同類とはいえ、この三本も、厳密に比較すれば、かなりの本文異同がある。三本の末尾をつぎに掲げる。

されはむかしもいまもこといふ事のなかりせは、かほとめてたき事のあるへきか、せんあくとてあしき事につよき物はせんにもつよきによつて、こんしやうもいみしく、こしやうもほとけになりけれは、めてたき事は此（この）さころもの中しやうにてとゝめたり、されは一ゑになさけふかく、心のやさしきゆへにかくなんありけり、おとこおん

なのならいは、たかきもいやしきもたかひにふかくおもひあひて、すへまてもなさけをしるならは、たれにはいかておとらまし、くわしくはなをおくのけくわんに見へたり、

（慶応義塾大学図書館蔵慶長二年写本　92頁[6]）

とり〳〵にこんしやうこしやうともにめてたし、

（内閣文庫蔵写本　585頁[7]）

むかしいまもこといふ事なかりせは、かほとめてたき事いかてあるへき、こんしやうもいみしき御事にて、らいせにてもめてたき事ともなりけり、めてたし〳〵、

（立命館大学蔵本）

ところで、やはり同類本とされる一本に、中野幸一氏編『奈良絵本絵巻集』十二（早稲田大学出版部　一九八八年）所収『狭衣の中将』（以下、「九曜文庫本」と称する）がある。同本は、立命館大学蔵本の本文と極めて近いことが判明した。ともに横型袋綴上下二冊の奈良絵本である。どちらも女君が筑紫行きの船上で思い煩うところで上冊が終わっており、上下冊間の本文の区切りは一致する。本文の異同は、漢字や仮名の表記、音便、助詞や助動詞の有無などは枚挙に遑ないが、それらを除けば、とくに大きな違いはないといってよい。

以下、具体的な例を提示し、立命館大学蔵本と九曜文庫本との本文の関係を考察する。

狭衣中将が帝より筑紫国太宰府を賜る場面である。立命館大学蔵本にはつぎのようにある。

君（きみ）よりせんしにて、つくしのたさいふを**ひ**（たひ）にけり、うちより出させ給ひ、ち丶たいしんに此よし**かたり申**（かたり）たまへは、めてたき事かな、**さらはちきり**（さらはちき）にはいか丶せん、**ちうしやう**（中将）の御めのこひやうへとありけれは、けにもとて、十一月十二日にさため給ふ、

（立命館大学蔵本　上冊一三丁裏）

文中のゴシックは九曜文庫本と異同がある箇所で、〔　〕内に九曜文庫本の本文を掲げる。これらの箇所に関しては、九曜文庫本のほうが意味をとりやすいようにも感じられるが、それほど大きな違いではない。問題となるのは、傍線部である。同場面の慶應義塾大学図書館蔵慶長二年写本を掲げる。

君のせんしさて、つくしのたさいふをたひにけり、うちより出させたまひて、ち丶大しやうにこのよしかたり申たまへは、めてたき事哉、さらはちきにはいか丶せん、中しやうのめのとこにひやうへの大夫といし人あり、それを御だいくわんにくたすへしとありけれは、けにもとて十一月十二日にさたまりさせ、

（慶応義塾大学図書館蔵慶長二年写本　73頁）

右の傍線部では、狭衣の代官として、乳母子の兵衛大夫を下向させるという狭衣父の意向が書かれている。いっぽう立命館大学蔵本と九曜文庫本にはそれがなく、文意不明といわざるを得ない。

狭衣は、奈良の大仏でひとりの僧と邂逅し、それが行方不

明の飛鳥井女君兄と察知する。自らの素性を明かそうとした途端、兄僧は尼に呼び出され、突如姿を消す。尼から常盤という地名を聞き出した狭衣は、探し歩いた末、兄僧の居場所を突きとめる。下冊のこの一連のくだりは、大団円へとつながる後半の最高潮である。慶應義塾大学図書館蔵慶長二年写本は、左に傍線を付したとおり、狭衣が尼を問いただし、ふたたび流浪の旅へとさまよい出す事情が詳しく書かれている。

此あまのたもとをひきかへし、たゝいまのよひつる御はうはいかなる人そ、いつくゑゆきたまひたるそと、何事によひ申たるそと、とひたまへは、此あまは此あたりにすむ物にて候か、たひ人の候つるか、あれなる御きやうあそはす御はうよひまいらせよと申ほとによひ申、さてはしらすと申、さもあれなに事をかいゝけんとつよくたつねけれは、あま申やう、なにとなうきゝ候へは、いもとの姫君のにはかにきへいりたまふ、いま一め見せまいらせんと申つる、御はうあさましや、此ほとこの御たうにこもりしも、そのいのちを申のへんためそかしとて、なみたをなかしてはしりたまひけるほとに、いとうしさにいつくの人にておはしますと申けれは、ときわとはかりこたへつる、中しやうこれをきゝたまふ、ときわとはかりをうちきゝて、たつね〳〵おはしますほとに、ある山のみねに物さひしきいほりの、さすか心ある人のすむやとゝおほしくて、こしやすみてたちより、よろつをあんして御らんしてまし〳〵けるに、あんせちのまへにちいさきあたらしきせきたうあり、いまた、ひさしくもみへされは、あわれいかなる人のむなしくなりたるらん、おやもしたしき人もある人ならは、さこそはかなしかるらん、いろこそかわれ、物のなけきはよもかはらしとつく〳〵とまほりたまふほとに、あんせちのかたわらにほけきやうをよみてなくをとのきこゆるを、よく〳〵きゝたまへは、ならにて見うしなひし御はうのこゑにてわたりけれは、（慶応義塾大学図書館蔵慶長二年写本　83–84頁）

立命館大学蔵本は、傍線部が極端に簡潔である。これでは、尼の袂をつかんで問い詰めようとする局面から、ただちに兄僧と再会へと展開することとなり、話のつながりが不自然である。

此あまのたもとをひかへて、たゝいまよひつる御はうはいつくそ、ひさしく〔久しく〕もみえさりけれは、あはれいかなる人のむなしくなりたるらん、おやもしたしき人もある人ならは、さこそかなしかり、いろこそかはれとも、なけきはよもかはらしとつく〳〵まほり〔まふり〕給ふほとに、あんしつのすこしある〔有〕かたにほけきやうよみてなくをとなんとゝきこえけり、よく〳〵きゝ給へは、なくにて〔にてそある〕みうしなひつる御はうのこゑにたりけれは、（立命館大学蔵本　下冊一三丁表–一四丁表）

九曜文庫本は、右の立命館大学蔵本のゴシックにした四箇

所に対し、〔　〕内に示したような異同がある程度である。つまり、この両本に関しては、慶応義塾大学図書館蔵慶長二年写本と比較したときに判明する大きな脱落が共通する。これにより、立命館大学蔵本と九曜文庫本の密接な関係を証明できる。

立命館大学蔵本と九曜文庫本とで本文が異なる箇所も散見する。

あこまる〔あこ丸〕かち、はいまたはらのうちにありしときより**うせ給ひて**〔うせ給ひて候、はゝうへはあの思ひにや、むなしくならせ給ひて〕、けふ七日なり、（立命館大学蔵本　下冊一八丁裏）

右は飛鳥井女君の遺児若君が、狭衣に自分の身の上を語る場面である。「あこまるかち、」（若君の父、すなわち狭衣）が姿を消して七日目という意ととれようが、ゴシックにした語句を〔　〕内の九曜文庫本に置き換えると、父は若君が生まれる前に行方知れずとなり、母はそのために気を煩って亡くなり今日で七日経つ、となり、つじつまが合う。これは立命館大学蔵本の脱文と判断すべきだろう。

九曜文庫本の脱落かと思われる箇所も確認できる。清水の僧から飛鳥井女君を救出した狭衣は女君の許で一夜を過ごし、それ以降関係を続けることとなる。

やこゑのとりもつけければ、おきわかれ給ひけんなこりさこそ物〔もの〕うくおほすらん、さすか**人めをつゝみ給ふ御なか**〔ナシ〕なれは、又くるゝよと**ちきり給ふ**〔契りたまふ〕御かへり**あり**〔有〕て、それよりは**一よのへたてもなくおもひ給ふ**〔ナシ〕、**年**〔とし〕月かさなりけれとも、ちゝはゝはしり**たまはす**〔給はす〕、（立命館大学蔵本　上冊一二丁裏）

立命館大学蔵本に比べると、ゴシックの箇所について、九曜文庫本では、〔　〕内のように、まとまりのある語句を有していない。同様の脱落は、上冊に六箇所、下冊に二箇所を見いだす。**［翻刻］**に両本の本文を対校した結果も示したので、参照されたい。

立命館大学蔵本と九曜文庫本とは、慶應義塾大学図書館蔵慶長二年写本との比較から窺われたような、大きな差異はない。しかし、一行以内におさまるようなある程度の長さの語句の相違は見て取れた。両本の書承関係はまったく不明であり、今後の課題というほかないありさまではある。すくなくとも、本文を比較検討した結果、同類本のなかでも、立命館大学蔵本と九曜文庫本とは近い関係にあるということができる。

おしまいに、立命館大学蔵本の挿絵について簡単に論述する。立命館大学蔵本は、上冊に七図、下冊に六図の挿絵を有する。とくに見開きの挿絵が多く、上冊に三図（挿絵一・挿絵二・挿絵七）、下冊に一図（挿絵一一）の計四図である。九曜文庫本には、立命館大学蔵本とほぼ同じ画面構成の挿絵がほぼ同数認められる。しかし、見開きの挿絵に限っては、九

曜文庫本は一図である。[8] 見開きの挿絵が多いことは、立命館大学蔵本の特徴といってよいだろう。

なお、立命館大学蔵本は、九曜文庫本にある挿絵一図が見当たらない。この挿絵は、兄僧と両親の三人が対面する構図であり、入水した女君を助けた兄僧が、上京して両親に事の次第を報告する場面にあたる。[9]

このほか、九曜文庫本に比べると、細かな構図や挿絵の位置などの相違が目に付く。本稿では、上下二冊のそれぞれの表紙、墨付第一丁とともに、全挿絵の図版も掲載する。合わせて御覧いただきたい。

本稿は、「二〇一三年度立命館大学図書館研究共通資料・大型」の共同研究課題「物語文学の〈享受環境〉と〈絵画化〉に関する総合的研究」の成果である。

注

（1）慶応義塾大学斯道文庫書誌叢刊二『室町時代物語類現存本簡明目録』（井上書房　一九六二年）、「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』三省堂　一九八二年）ほか。

（2）「狭衣の草子について」（『王朝文学』創刊号　一九五八年十一月）、「『狭衣の草子』の異本の種類とその伝本」（『文学論藻』二十一　一九六一年十一月）、「在パリ『狭衣の草子』について―諸伝本の分類と関連して―」（『文学論藻』五十九　一九八五年二月）。

（3）「『狭衣物語』から室町時代物語『さごろも』へ―その改作方法について―」（『論究日本文学』四十四　一九八一年五月）、「『狭衣の草子』諸本の展開とその文芸性」（『立命館文学』五〇五　一九八八年三月）、「近世期の『狭衣の草子』―異本作製の方法と享受―」（『立命館文学』五一二　一九八九年八月）。

（4）同本は、松本隆信氏編『影印室町物語集成』第四輯（汲古書院　一九七一年）に影印が、横山重氏・松本隆信氏編『室町時代物語大成』第六（角川書店　一九七八年）に翻刻が、それぞれ紹介されている。

（5）松本隆信氏編『室町時代物語大成』補遺一（角川書店　一九八七年）に同本の翻刻がある。

（6）前掲注（4）『室町時代物語大成』第六から引用した。頁数も同本による。ただし、前掲注（4）『影印室町物語集成』を参照し、一部改めた箇所がある。以下、慶應義塾大学図書館蔵慶長二年写本の本文引用も同様である。

（7）前掲注（5）『室町時代物語大成』補遺一より、一部読点を改め、引用した。頁数も同本による。

（8）『奈良絵本絵巻集』十二46・47頁に掲載。なお、立命館大学蔵本のこの場面の挿絵も見開きである（挿絵七）。

（9）『奈良絵本絵巻集』十二66頁に掲載。

（須藤）

［凡例］

立命館大学図書館蔵奈良絵本『さころも』を翻刻する。翻刻に際しては、原本に忠実であるよう努めたが、以下のような方針で手を加えた。

一、原文に適宜読点を付した。

二、漢字の字体は、原則として通行の字体に改めた。

三、清濁は原文のとおりにした。

四、改行は原本のとおりにした。丁うつりは、「|」（上冊一丁表）」のように示した。

五、本文中の和歌に通し番号を付した。

六、挿絵のある箇所を「（挿絵）」として、漢数字の通し番号とともに示した。

七、原文に誤りの疑いがある場合、該当箇所の右傍の（）内に期待される本文を示した。

八、そのほか、特記事項を（）内に示した。

なお、『奈良絵本絵巻集』十二所収『狭衣の中将』（九曜文庫本）と本文の異同がある箇所について、本文の右傍に「※」印を付し、行末にゴシックで対校結果を示した。

翻刻は、上冊を須藤が、下冊を川崎が担当した。

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

（すどう・けい　立命館大学助教）
（かわさき・さちこ　立命館大学准教授）

web公開に際し、画像は省略しました

【上冊表紙】

web公開に際し、画像は省略しました

【上冊一丁】

【下冊表紙】

web公開に際し、画像は省略しました

【下冊一丁】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵二】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵二】

web 公開に際し、
画像は省略しました

【挿絵三】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵四】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵五】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵六】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵七】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵八】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵九】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵一〇】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵一一】

web公開に際し、画
像は省略しました

【挿絵一二】

web公開に際し、画像は省略しました

【挿絵一三】

web公開に際し、画像は省略しました